

日本自動車殿堂

「2022 殿堂者（殿堂入り）」「2022 歴史遺産車」

「2022～2023 日本自動車殿堂イヤー賞 4賞」決定

NPO 法人 日本自動車殿堂 会長 藤本 隆宏(東京大学 名誉教授)

事務局: 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-32 3F

TEL:03-3291-8511 / FAX:03-3291-4418 <https://www.jahfa.jp>

1. 2022 日本自動車殿堂 殿堂者（殿堂入り） 4名



山羽 虎夫
自動車大國日本の端緒を開く



中村 健也
トヨタの純国産乗用車
開発・量産の道を拓く



増田 忠
国産初の御料車や
日産初の前輪駆動車の開発を推進



篠塚建次郎
モータースポーツ発展に寄与した
日本人初の国際ラリー総合優勝者

2. 2022 日本自動車殿堂 歴史遺産車 4車



筑波号
(1934年)



ニッサン フェアレディ Z / DATSUN 240Z
(1969年/1970年)



スズキ GSX1100S KATANA/GSX750S
(1981年/1982年)



トヨタ プリウス
(1997年)

3. 2022～2023 日本自動車殿堂 イヤー賞 4賞



日本自動車殿堂
カーオブサイヤー
日産 サクラ/三菱 eK クロス EV



日本自動車殿堂
インポートカーオブサイヤー
メルセデス・ベンツ EQS



日本自動車殿堂
カーデザインオブサイヤー
トヨタ クラウン(クロスオーバー)



日本自動車殿堂
カーテクノロジーオブサイヤー
ドライバーサポート緊急時対応の技術:マツダ CX-60

2022 殿堂者（殿堂入り） 2022 歴史遺産車 2022～2023 日本自動車殿堂イヤー賞

NPO 法人 日本自動車殿堂 会長 藤本 隆宏(東京大学 名誉教授)

事務局: 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-32 3F

TEL:03-3291-8511/FAX:03-3291-4418 <https://www.jahfa.jp>

**表彰式典:2022年(令和4年)11月15日(火曜日)13時30分から、
学士会館(東京都千代田区神田錦町3-28)にて。
オフィシャルサイトにて同時配信します(<https://www.jahfa.jp>)**

1. 2022 日本自動車殿堂 殿堂者（殿堂入り） 4名

山羽 虎夫 氏

(国産初の蒸気自動車を製作、1874～1957)

自動車大国日本の端緒を開く

山羽虎夫(やまば・とらお)氏は20世紀初頭にあつて自動車とその動力源に高い関心を持ち、わが国初の蒸気自動車を製作し、その後の自動車国産化、さらには自動車大国日本の端緒を切り開かれました。その偉業をたたえ永く伝承して参ります。

中村 健也 氏

(初代クラウン開発主査、1913～1998)

トヨタの純国産乗用車開発・量産の道を拓く

中村健也(なかむら・けんや)氏は生産設備を開発して量産体制を構築、トヨタの初代主査として純国産乗用車クラウンの開発を指揮するとともに、主力車種の開発を担当し、その後に続く主査制度を確立されました。その偉業をたたえ永く伝承して参ります。

増田 忠 氏

(元日産自動車 第二設計部長、元愛知機械工業取締役設計部長、1923～1998)

国産初の御料車や日産初の前輪駆動車の開発を推進

増田忠(ますだ・ただし)氏は軽自動車フライング・フェザーの開発に携わり、国産初の御料車の開発を主導、数々の新技術に挑戦するとともに、日産初の前輪駆動車の開発を手がけ、その後の大衆車の基盤技術を確立されました。その偉業をたたえ永く伝承して参ります。

篠塚 建次郎 氏

(ラリードライバー、1948～)

モータースポーツ発展に寄与した日本人初の国際ラリー総合優勝者

篠塚建次郎(しのづか・けんじろう)氏はパリ・ダカール・ラリーと WRC(世界ラリー選手権)で日本人ドライバーとして初の総合優勝を成し遂げ、ラリー競技への認知度を高めるとともに、アフリカでの教育環境向上に尽力するなど、社会貢献活動も積極的に進められました。その偉業をたたえ永く伝承して参ります。

2. 2022 日本自動車殿堂 歴史遺産車 4車

筑波号 (1934年)

筑波号は、わが国最初の前輪駆動小型乗用車として130台が製造された。前輪駆動車は世界の乗用車の主流であり、日本においてはその嚆矢となった歴史的名車である。

ニッサン フェアレディ Z (1969年) / DATSUN 240Z (1970年)

ニッサン フェアレディ Z / DATSUN 240Z は、米国市場が求めるスポーツカーとして登場、国内外で高く評価され、モータースポーツでも活躍、約9年間で世界販売52万台を記録した歴史的名車である。

スズキ GSX1100S KATANA (1981年) / GSX750S (1982年)

「日本刀」をイメージしてデザインされたスズキ GSX1100S KATANA / GSX750S は、欧州市場をはじめ日本でも高く評価され、スズキブランドの確立とシェアの拡大に貢献、世界の二輪車市場で新しいジャンルを切り拓いた歴史的名車である。

トヨタ プリウス(1997年)

トヨタ プリウスはハイブリッドシステムを搭載した世界初の量産乗用車として販売され、その後の環境対応技術の先駆けとなり、燃費の向上、二酸化炭素の排出削減において技術的方向性を指し示した歴史的名車である。

3. 2022～2023 日本自動車殿堂 イヤー賞 4賞

2022～2023 日本自動車殿堂カーオブザイヤー（国産乗用車）

「日産 サクラ/三菱 eK クロス EV」および開発グループ

国内EV市場の拡大に貢献する軽規格適合の本格的EV
クラスを超えた力強いEVの走りと高い質感の内装
軽自動車ながら優れた走行安全アシストシステムを装備

2022～2023 日本自動車殿堂インポートカーオブザイヤー（輸入乗用車）

「メルセデス・ベンツ EQS」およびインポーター

高い空力特性とEVの未来を感じさせるエクステリア
完成度の高いEV専用プラットフォーム
先進かつ独自のテクノロジーに裏打ちされたUI

2022～2023 日本自動車殿堂カーデザインオブザイヤー（国産・輸入乗用車）

「トヨタ クラウン（クロスオーバー）」およびデザイングループ

トヨタのフラッグシップ初のクロスオーバーデザイン
環境・安全技術を融合させたスマートなエクステリア
使いやすさと楽しさを組み込んだ新鮮なインテリア

2022～2023 日本自動車殿堂カーテクノロジーオブザイヤー（国産・輸入乗用車）

「ドライバーサポートと緊急時対応の技術：マツダ CX-60」および開発グループ

ドライバー・モニタリング
ドライバー異常時対応システム(DEA)
ドライバー・パーソナライゼーション・システム

【問い合わせ先】

日本自動車殿堂 事務局

担当 武川 明

info@jahfa.jp

TEL:03-3291-8511 FAX:03-3291-4418

* 日本自動車殿堂の組織、活動実績などについては <https://www.jahfa.jp> をご覧ください。

* 受賞者(車)の詳細、写真データは11月8日(火)午後12時に公開いたします。

<https://www.jahfa.jp>

参考資料 1

2022～2023 日本自動車殿堂イヤー賞投票結果(各賞ベスト3)

2022～2023 日本自動車殿堂カーオブザイヤー		(MAX:2000点)
1位	「日産 サクラ/三菱 eK クロス EV」	1686 点
2位	「トヨタ クラウン(クロスオーバー)」	1511 点
3位	「日産 アリア」	1306 点
2022～2023 日本自動車殿堂インポートカーオブザイヤー		(MAX:1900 点)
1位	「メルセデス・ベンツ EQS」	1509 点
2位	「アウディ e-tron GT」	1385 点
3位	「フィアット 500e 」	1301 点
2022～2023 日本自動車殿堂カーデザインオブザイヤー		(MAX:1700 点)
1位	「トヨタ クラウン(クロスオーバー)」	1378 点
2位	「メルセデス・ベンツ EQS」	1115 点
3位	「日産 アリア」	1063 点
2022～2023 日本自動車殿堂カーテクノロジーオブザイヤー		(MAX:1700 点)
1位	「ドライバーサポートと緊急時対応の技術:マツダ CX-60」	1219 点
2位	「e-4ORCE:日産 アリア」	1182 点
3位	「e:HEV:ホンダ シビック」	1057 点

参考資料 2

日本自動車殿堂・イヤー賞の選考要領(抜粋)

1. イヤー賞 4 賞の選考

当該年度において発表・発売された新型車の中で「最も優れた乗用車・輸入車・デザイン・テクノロジーおよびそれらの開発グループ等」を表彰する。

2. 年次の選考対象期間

本年度の新型車の対象期間は、2021 年 10 月 16 日から 2022 年 10 月 15 日までをその期間とする。

3. 選考方法

(1)イヤー賞は、選考の客観化と定量化そして高質化を目指し、事前に各賞の選考委員集団の評価特性を位置付ける。すなわち、評価を行う側の委員の評価特性を「実用利便性」「経済性」「先進性」「安全性」「環境性」「審美性」などの項目により計量・解析し、レーダーチャートによって提示する。

(2)各賞の選考は、選考委員の投票(上位 6 車選出・評価総合点)によって行う。

(3)選考委員は、自動車研究に係る大学教授や研究開発機関の研究者等とし、4賞に延べ 74 名があたる。

(4)選考の投票には、総合評価および階層分析法(Analytic Hierarchy Process)を組み合わせた選考準備委員会が構築した統計分析・評価方式(データの正規化などによる評価の客観化・定量化)を用いる。

以上